

先生を縛る考え方

指導者は専門の知識や技術のほかに豊かな人間性を有していなければならない。かつては人望人徳という言葉で重視されたが、現在人間性は指導者の必須条件と見なされていない。会社でも学校でも指導者の人間性の向上は軽視され、そのため欠落した人間性の持ち主がふえている。

経宮管理講座 298 染谷和巳

利己的な冷たい心の女性教師

私が六十年前に卒業したS小学校は近年評判が悪い。

父親が自転車に乗せ、足を巻き込まれて足を骨折した子がいた。担任の女教師は学校の責任ではないから、他の生徒に迷惑がかからないよう家族が面倒を見るよう要求した。

給食時は並んで配給を受けられないので家族が来る。トイレのために二時間に一度家族が学校に来る。体育や教室外の授業はその子一人教室に置きざりにされた。

生徒からこの話を聞いた父母は「何と冷たい先生だ」と怒った。弱いものをいたわろうといった道徳教育の格好の機会ではないか。

皆でその子の面倒を見、体育は外に連れ出して見学させる。助け合いやおもいよりの心が身につく。先生はその反対を行った。自分の仕事ではないからと家族を教室に呼びつけた。

「こんな学校には入れたくない」と親は子を他地区の学校に入れた。S小学校は生徒数が減り、二クラス分の生徒を集められず、先生は毎年町へ出て「是非ウチへ」とセールの活動をしている。

京都の市立校の元校長辻井勝氏がつぎのような手紙をくれた。

九月号の「学校はよくなるか」

での「最重要課題は教師の質の向上」には全く同感です。

最近の若年教員は大学や大学院で真面目に単位を取って、いわゆる専門の知識を持った人が多いです。しかし本当に子供が好きで職員室に戻らず、泥まみれになって子供とかかわるといふ熱血教師が少いのです。

休み時間、教師は子供と離れ、テストのまるつけをしたり雑談をしたりしています。たまにはなくいつもそうしています。

授業も子供に何とかわからせようという努力をせず、わからなくても時間が過ぎれば「教えた」ということになっています。

子供との接触をわずらわしく思い、子供と心を通じ合うことの大切さがわからない先生が増えていくように思います。

子供より自分を大切にする先生が増えています。またそれを支持する教育評論家やメディアがあります。ワークアンドドライブバランス。超勤縮減は一生懸命教師の仕事をしようにとする若者に休むことを奨励しています。

校長が教員を厳しく指導すると、逆にパワハラだと非難されます。ダメな教員でも、よほどの不祥事でも起こさないと、辞めさせることはできません。

子供のため、また学校教育のため、こうした教員の現状を変えな

ければなりません。

さて最近、京都そうじに学ぶ会の一員として、福井県永平寺町立上志比中学校へ行ってきました。

同じ永平寺町の永平寺中学は何年前にNHKの「鶴瓶の家族に乾杯」に取りあげられました。校門で全員が挨拶する。無言で学校をピカピカに掃除する。掃除の前

の全員の廊下での黙想正座には感動しました。公立中学です。

この永平寺中学同様、上志比中学にも私は感動しました。

廊下や教室の床はモップは使わず、生徒全員が雑巾で磨きます。どこもピカピカではこりなどありません。もちろん先生が先頭に立っています。

校長は「掃除は心磨きです。真剣に雑巾がけをすることによって生徒の心が磨かれます」と言っています。

この学校は十五歳になると「立志式」をします。郷土の偉人、橋本左内の「啓発録」にある「立志」

「振気」勉強「去稚心」「扱交友」を教育の場で実践しているとのことでした。

こんな先生に教えられた子は冷たい利己的な心を持つ人になる。親がそんな学校に入れたくないと

思うのは当然である。

辻井氏が言う「ワークアンドドライブバランス」は仕事と私生活のバランスをとれという意味である。「教員も労働者」と主張し労働組合の活動をする日教組の

スターである。

S小学校の女教師は日教組のガチガチで超勤縮減の実行者。できない子を放課後に残して勉強させている新人教師を「仕事外のことをするな!」と怒鳴りつけてやめ

させた。

こんな先生に教えられた子は冷たい利己的な心を持つ人になる。親がそんな学校に入れたくないと

思うのは当然である。

軍隊でも傷病者は前線から後方に送られた。「戦え!」と言って前線に配置すれば戦士の足手まといになる。戦いに負ける。弱者は邪魔なのである。

弱者に対する思いやり。体育の時間、女教師は骨折児童を教室に置き去りにした。一人残された子供の気持ちに思いが及ばない。まともな人間ならクラスの体育の授業が見える場所に連れて行き、見学させる。

トイレや給食はまず自分が模範を示して、クラスの児童全員に順番で手伝いをさせて弱者に対する思いやりを行動に表す体験をさせる。

女教師は自分の仕事の範囲外のことは一切しない。意識の持ち主。この意識を労働者意識という。教師は労働組合に所属する労働者であって、児童の指導育成を担当する。先生ではない。

労働者意識とは人間本来の人間性を損う意識である。欠陥人間が

共通して持っている思想や考え方である。

たとえば事故、不祥事が多発しているJR北海道は民間企業ならとくに倒産している。民営化しているが国の補助金で存命している。北海道は新幹線がなく、施設や機械や組織の近代化が遅れており、そのため旧国鉄時代同様、労働組合の力が異様に強い。「働かない」ことを信念信条とする組合員は、線路の異常が判っても放置している。「働いてくれ」と頼む社長を追い詰めて自殺させた。

女教師はこのJR北海道の組合員と同じ意識の持ち主である。こうした教師が団結して行動すれば文科省も教育委員会も校長も太刀打ちできない。

民間から校長に選任された人が自殺したり辞めたりするのは「教員の経験がないから」ではなく、正常な考え方が全く通じない日教組の教師群に攻め滅ぼされたからである。

上司も社長も敵わない労働者

S校の女教師は教師として失格であるが、人間としても欠陥がある。つまりその人間性に問題がある。たとえば他者への気遣いと思いやり。

欠落した人間性の持ち主では

人間は考える輩。人間が植物や獣と違うのは「考える」点にある。難しく言えば思想、哲学であるが、解りやすく言えば物の見方考え方(意識)である。

考え方は色合いがある。黒い考え方、白い考え方、赤い考え方。この色合いを人間性という。人間性の骨格はその人の考え方の色合いによって決まる。

S校教師の考え方は黒。社会的地位の高い学校教師という職にあるが、家庭においてよき妻、よき母にはなれないし、勤勉でやさしい心の日本人とはつき合えない。

人間関係は同じ黒い考え方の欠陥人間たちに限定されるだろう。

そう、この教師はあの純心素朴な小原礼子の数年後の姿である。日教組の先輩に指導洗脳されて黒い考え方をすっかり身につけた。生徒に慕われ尊敬される先生ではない先生にはなれない。

一部ではあるが考え方は人間性の骨格である。上辺や細部が優れていても、骨が黒ければ全体に及ぶ。人はその虚飾を見抜く。子供でも見抜いて信頼尊敬しない。

訓練と自己啓発によって人間性を高めることができる。いくつになっても人は変わる。しかし小原先生、あなたは人々から忌み嫌われて自分の欠陥に気づかない。人間性を高めようと思えない。あなたは改心して白い考え方に転向しない限り、人間性豊かな「いい先生」にはなれない。